

10. 重症心身障害児者施設入所者の摂食食品の分析について

浅香めぐみ, 大西峰子, 新川 斉
渡部 茂, 五十嵐清治
(小児歯科)

過去に我々は、心身障害児者を対象に摂食食品の状態とう蝕や歯周疾患などの歯科疾患との関連性について調査した。すなわち、精神薄弱児者施設、重症心身障害児者施設などの施設入所児者の献立表を基に栄養学的調査を実施し、関連学会に報告してきた。これらによると、生後早期に入所し、歯科的な管理が受けられるような環境にある施設入所児者の方が、健常児や在宅障害児よりう蝕罹患率の低いことが明らかとなった。

このことは、歯科的管理のほか、施設入所児者は毎日の生活が規則的であり、食事やおやつの摂取量や種類が栄養士の管理のもとになされ、それが規則的に摂取されていることが大きな要因と思われた。

今回は、重症心身障害児者施設で使用した昭和62年4月から昭和63年3月までの1年間の献立表より、摂食食品の分析集計し、経年的な変化の比較検討を行ったので報告した。

摂食食品の集計に使用した基準値は1982年版三訂補食品成分表より普通の労作を行う場合の20歳男性の1日の必要栄養所要量2500カロリーを採用した。

各食品群と基準値とを比較すると魚介肉類が基準値より大きい値を示した。しかし、基準値にほぼ一致している穀物の他はいずれも基準値より小さい値を示した。特に果物、砂糖、油脂類、おやつのカロリーは基準値の約30%しか摂取していなかった。前回との比較では、砂糖、油脂類、おやつのカロリーは減少し、緑色野菜、淡色野菜、芋類、果物では増加が認められ、他の食品群ではあまり差は認められなかった。また、1日平均栄養所要量は基準値の約80%の摂取量を示し、前回とほぼ同様であった。

なお、前回よりも減少していた砂糖の摂取量については種々の要因が考えられ、これについては口腔および全身への影響も含めて、今後検討する予定である。

11. 高齢義歯装着者の咀嚼機能

昆 邦彦, 池田和博, 市岡典篤
田中 収, 平井敏博(補綴Ⅰ)

高齢者の咀嚼機能と精神活動および身体活動との間には密接な相関が有ることを見出して、第2回日本老年歯科医学研究会にて発表した。今回は引続き、昨年度本学会で発表した[咀嚼スコア]と身体、精神活動の関連について検索するため。札幌市内の老人病院と特別養護老人ホームの入所者を対象とし精神活動を評価する項目として、長谷川式簡易痴呆診査スケール、身体活動を評価する項目として握力および上肢機能検査のSTEFを、また、咀嚼機能を評価する項目として、演者らが定義した[義歯スコア]と[咀嚼スコア]をそれぞれ求めたが[義歯スコア]については、前回と同様な傾向が得られたので、今回は、特に[咀嚼スコア]に対する精神、身体活動の関連について検討を行った。

[咀嚼スコア]と長谷川式テストスコアとSTEFスコアにおいて有意水準99%で統計学的に有意な相関が認められた。

比握力については統計学的に有意な相関が認められなかったが全部床義歯標準咀嚼能力である60点を境に2群に分けて、その割合を比較すると60点以上の群は、60点以下の群より、比握力の大きい者がやや多い傾向が観察された。

可撤性義歯を所有もしくは、使用していない者の群と、義歯を使用している者、すなわち、日常、咀嚼作用を営んでいる者の群に分け、各検査項目について、その有意差を検定した結果、長谷川式テストスコア、STEFスコア、比握力、において1%の危険率で統計学的有意差が認められた。

高齢者における咀嚼機能を[咀嚼スコア]で表現し、これと精神活動、および身体活動に関連を検討した結果、両者には相関関係のあることが示唆された。さらに、義歯使用の有無は高齢者の精神活動、身体活動に関連のあることが、今回の調査でも明らかであった。